



兵庫県立
神戸高校

学校改革

伝統校が更なる 信頼醸成・実績向上に 向けて改革に着手

◎「質素剛健」「自重自治」を校訓に、文武両道を目指した教育を展開する。2004年度から3期連続でスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けている。13年度にはSSH科学技術人材育成重点校（中核拠点）の指定も受け、兵庫県における理数教育の中核としての活動を展開する。

設立	1896(明治29)年
形態	全日制／普通科・総合理学科／共学
生徒数	1学年約360人
2014年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、大阪市立大などに262人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ705人が合格。
住所	〒657-0804 兵庫県神戸市灘区城の下通1-5-1
電話	078-861-0434
Web Site	http://www.hyogo-c.ed.jp/~kobe-hs/

変革のステップ

背景

◎兵庫県の学区再編により、2015年度入試から神戸市は3学区から1学区に。また、教員採用数の増加により、校内の若手教師の比率が高まった

実践

◎全校の教員研修会等で指導を伝承しながら、3年次での外部の記述模試の導入、大学と連携した説明会の実施など、進路指導の見直し、改革に着手

成果

◎改革の具体的な施策について多様な意見が出される。神戸高校の将来を見据えて、より良い学校づくりに向けた議論がなされている

学区再編により成績上位層の
1校集中の可能性が浮上

兵庫を代表する進学校の1つである兵庫県立神戸高校は、神戸港を見下ろす高台にあり、古城を模した優雅な校舎はイギリスのパブリックスクールの理想を体現している。赴任1年目の尾原周治おぼしむらじ教頭は、生徒の印象を次のように語る。「生徒は、部活動に一生懸命取り組む一方、勉強にも手を抜かず、練習や遠征の合間を縫って自学に取り組んでいます。『質素剛健』『自重自治』の校訓が、生徒の間にはしっかり根付いていると感じます」

進学実績も好調で、東京大・京都大・大阪大・神戸大に合わせて例年100人以上が合格する。良き伝統を受け継ぎ、実績を上げ続ける同校だが、学校を取り巻く環境は大きく変わりつつある。1つは学区再編だ。兵庫県の公立高校の学区は、2015年度入試において、現行の16学区から5学区に再編され、神戸市では3学区から1学区となる。同校及び兵庫高校、長田ながた高校という各学区の進学校が同一学区になるため、「選ばれる学校」として、これまで以上に魅力を打ち出す必要に迫られていた。進路指導部部長の森川喜一よしかず先生は次のように話す。

「本校は学区のトップ校として、地域から揺るぎない信頼を得てきました。それは、全ての教師が、生徒の夢をかなえたいという思

いを持って指導に取り組んできた証です。しかし、学区再編という大きな環境変化を迎え、今までと同じ指導だけでよいのかと考えるようになりました。もちろん、学校の評価は、進学実績だけで決まるものではありません。しかし、本校への進学希望者の半数以上が、本校のアンケートにおいて『進学実績が進学したい高校決定の大きな要因となる』と回答したことを考えると、その期待に応える責務が学校にはあると思います。現在、神戸市の上位3校だけで、京都大・大阪大・神戸大の



兵庫県立神戸高校教頭
尾原周治 おはら・しゅうじ
教職歴30年。同校に赴任して1年目。「卒業式の後、生徒が『この学校に来て良かった』と言える学校をつくりたい」



兵庫県立神戸高校
森川喜一 もりかわ・よしかず
教職歴37年。同校に赴任して7年目。進路指導部部長。「どんな局面でも生徒が持てる力を出し切れるよう、学習・生活両面から支援し続けたい」



兵庫県立神戸高校
西村達 にしむら・たつし
教職歴24年。同校に赴任して12年目。進路指導部次長。「幅広い視野を持ち社会で活躍できる人となるよう、あらゆる場面で生徒を支援したい」



兵庫県立神戸高校
雲田彩加 くもだ・あやか
教職歴1年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「学校生活のさまざまな場面を通じて、人間教育を行い、社会に貢献できる大人に育てたい」

合格者数は、毎年約250人くらいはあります。この合格者数が学区再編によって1つの公立高校の進学実績となり得る可能性がある中、その可能性を実現できる学校となるためには何をすべきなのかを、今こそ考える必要があるのだと思います。それが、5年先、10年先の本校の財産になるはずですよ」

校内の若手教師の増加も課題だった。以前は、同校に赴任してくる教師の大半が他校で経験を積んだ者であったが、団塊世代の大量退職を迎えて、12年度から毎年教職1、2年目の若手教師が複数名、同校に配属されるようになった。蓄積してきたノウハウを若手に伝え、全体の指導力の底上げを図ることも喫緊の課題だった。

実力考査・外部模試の併用で指導の質の維持・向上を図る

12年度、同校が初めて3年次に外部の記述模試を導入したのは、そうした意識の表れだった。同校では、校内で問題を作成する「実力考査」を大学入試の合格可能性判定に活用してきた。実力考査は、1・2年生では年3回、3年生では年5回実施していたが、そのうち3年生の10月考査を進研模試（記述）にした。若手教師が増える中でも指導の質を保つことが、外部の記述模試導入の狙いだった。

「実力考査は、近年の大学入試の動向を分

析し、どのような問題が出ているのか、どのような力が問われているのかを踏まえて作問します。経験の浅い先生が、本校に赴任してすぐに問題を作るのは至難の業です。その上、入試の実態とずれていることに、教師が気付かないまま3年生を迎えたら、手遅れになりかねません。そうした事態を防ぐためにも、全国の学校と客観的に比較できる外部の記述模試を併用しようと考えました」（森川先生）
3年次での外部の記述模試の導入は創立以来の変革だが、それによって実力考査の重要性が揺らぐことはない。実力考査では、入試の過去問などは使用せず、必ず教師がオリジナルの問題を作成し、それを教科内で検討する会議を4、5回開く。この作問・検討の過程が、教師の指導力を維持・向上させる土台であると、進路指導部次長の西村達先生は指摘する。

「実力考査の問題作成は、本校に赴任して最初にぶつかった大きな壁でした。自分より若い先生から『この問題では駄目です』と言われることもありましたが、はつきり指摘してもらったからこそ指導力の向上につながりました。学校全体として指導力を妥協なく高めてきた文化は、本校の伝統です」
赴任1年目の雲田彩加先生は、実力考査の作問はまだ担当していないものの、定期考査で先輩教師の指導を受けながら経験を積んでいる。

「私が作った問題に対して、毎回、『問題量

が少ない』『記述問題を増やした方がよい』といった具体的な指摘をいただけるので勉強になります。先輩方は、定期考査に加え実力考査を年4回も作っており、その労力と情熱は並大抵のものではないと感じます」

実力考査に基づく研修会で 進路指導のノウハウを共有

実力考査後にも、毎回学年・教科で検討会を開いて結果を分析し、それを授業改善に生かすために、正答率の低かった問題を授業で解説したり、教え方を工夫したりしている。分析結果は、月3、4回発行する進路通信『自己実現』を通して生徒にも公表する。中には、自らフィードバックして、自身の弱点の克服につなげている生徒もいるという。

更に、13年度には初めて、合格大学と実力考査の結果分析に基づく全校での教員研修会も開いた。同校では、生徒一人ひとりについて、1〜3年生の成績、実際の合格大学などのデータが毎年蓄積され、参照できるようにしている。進路指導の指針となる重要なデータだ。

「長年本校に勤務している先生なら、生徒がどの程度伸びていくのかが感覚的にも分かっています。経験の浅い先生にはそれかなかなか見通せません。客観的なデータを基にした考え方や分析ノウハウを共有すること

で、若手教師の指導力の向上を図ると共に、ベテラン教師も同じ目線で指導に当たることが出来ると考えています」（森川先生）
実力考査を通じ、生徒と教師が共に成長していく仕組みが、同校の実績と信頼を支えている。

進路通信は進路指導部が 学校内外に示す「心意気」

模試の改革と共に、同校が力を入れているのが、進路意識の深化・明確化である。

「私が赴任した十数年前と比べると、教師の指示に素直に従う、聞きわけのよい生徒が増えました。しかし、周りに振り回されずに、自分の意志を貫き通す姿勢は弱くなっていると感じます。ただ、それは表に出てこないだけで、内面に思いを秘めているのだと思います。さまざまな刺激を与え、潜在的な力を引き出したいと考えています」（西村先生）

13年度からLHRで職業研究、学部・学科研究を始めたのも、その一環である。将来何がしたいのか、それを実現できる職業は何か、1年生1・2学期を使って調べ学習を行い、1年生後半の文理選択に生かす。同年7・11月には、初めて大阪大と京都大の職員を招いての大学説明会も開催した。

「両大学の入試課職員に入試結果の報

告などをしていただきました。それまでは、生徒が大学を訪れたり、学校で大学の出前講座を開いたりすることはありましたが、入試課職員に来ていただくのは初めてでした。生徒は大学に一層親しみを感じ、入学したいという思いを強くしたようです」（森川先生）
年間に40号程発行している進路通信『自己実現』は、生徒にエールを送り、勇気を与えるためのツールだ（図）。進路行事の通知や実力考査の分析結果などの情報の他、「3年という学

図 「自己実現」センター試験激励号



センター試験当日、生徒に配布した『自己実現』のセンター試験当日版。教師一人ひとりの名前と激励のコメントが記されている。写真は、同校オリジナルの旗。センター試験当日、尾原教頭らが旗を持ち、生徒を励ました。



*学校資料から抜粋して掲載

年は『高校生活のゴール』と『新たなステージへの飛躍』が共生する学年』など、生徒を鼓舞する言葉が並ぶ。『自己実現』は3年生対象だが、1・2年生にも進路通信を各学期1〜2回程度発行し、低学年次からの情報提供に努めている。

「進路通信の作成は大変ですが、これを発行し続けることによって、私たち教師の心意気を、生徒や保護者に伝えることになると考えています」（西村先生）

13年度には、全校生徒の保護者を対象にした進路研修会をPTAと共同で開催。継続実施を望む声が多く、今後も、大学や保護者と連携した進路指導を続けていく考えだ。

多様な意見を交わすことが 更に良い学校づくりにつながる

環境変化を見据えて改革に着手した神戸高校だが、具体的な施策については校内でさまざまな意見があり、議論をしながら進めている過程だという。

「実力考査や進路通信は、情報共有や若手教師の育成という面もさることながら、実はそれ自体が、先生方の目線を合わせ、思いを1つにするための取り組みでもあります。私自身も、そのための実践を進めてきました。どこまで学校を変えるべきかという議論では、ためらう場面も少なくありません。そ

若手教師が語る、指導変革への情熱

生徒と共に 成長している自分を実感

進路指導部 雲田彩加

教職1年目で、県内でも上位の進学校である本校に赴任しました。赴任が決まった時には、私よりも勉強の出来る生徒を教えなければいけないというプレッシャーにとらわれ、教師として自分に何が出来るのだろうかと不安でいっぱいでした。しかし、赴任してみると、生徒は私の指導を素直に受け入れてくれ、指導で困ることはありませんでした。授業の内容で質問を受けることも多く、生徒への指導を通して、私も一緒に成長していることを実感しています。

そうした生徒の姿と共に、この1年で私が最も刺激を受けたのが、ベテランの先生方の指導に対する情熱と信念です。私は高校時代に校内実力考査を受けた経験がなく、合格可能性判定のための外部模試を受けただけでした。本校では定期考査の他にも、オリジナルの実力考査の問題を年3、4回作成し、毎回、結果を分析して、授業改善や生徒への声掛けに生かしています。そうした徹底した実践こそ、生徒のためになる進路指導なのだと思感すると共に、高校時代には分からなかった教師の大変さを感じ、身が引き締まります。

生徒のため、学校のためになることは、私自身にとっても必ず成長の糧になるはず。一朝一夕には出来ませんが、先輩の先生方に支えられながら1つずつ勉強を積み重ねて、教科指導だけではなく進路指導でも生徒たちの力になれるように、努力していきたいと思えます。

ういう意味で慎重になっているのかもしれない。せんが、多様な意見を交わし合う中で、更に強い学校組織が構築されていくのではないのでしょうか」（西村先生）

「これまでの伝統や良さは大切にしながらも、常に先を見て、現状のままが良いのかを問い続けるべきだと思います。今回の学区再編がなかったとしても、不断の変革を図る必要があると、私は考えます。実績が下がってから動いたのでは、生徒や地域に対して責任を果たしたとはいえません。マイナスになる改革はもちろん不要ですが、プラスかマイナスか分からないのなら、まず動き、改善を加えればよいのです。現状では問題が顕在化し

ていなくても、常に学校のあり方を見直すことが、5年後、10年後も、神戸高校が地域の信頼を得る学校であり続けるために必要だと思えます」（森川先生）

尾原教頭は、同校の今後の改革について次のように語る。

「伝統校ほど新しいことに取り組むためには大きなエネルギーが必要です。管理職としてはこの改革がスムーズに行えるよう、組織の見直しや組織間の連携を図っていかねばなりません。本校の全ての先生が『生徒のため』という思いを持っています。それがある限り、改革を巡る議論が更に良い学校づくりにつながると確信しています」

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年10月号指導変革の軌跡「新潟県立新潟高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け